

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22530999

研究課題名（和文）

美術教育に適した評価方法の開発を通じた学力に関する基礎的研究

研究課題名（英文）

Fundamental Studies of Learning abilities through the Development of Evaluation Methods in Art Education

研究代表者

奥村高明（OKUMURA TAKAAKI）

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号：80413904

研究成果の概要（和文）：美術教育の学力調査について、課題Ⅰ「英米の評価基準や評価方法の検討」と課題Ⅱ「評価規準表の作成と評価方法の開発」の二つの側面から研究した。課題Ⅰについては日米の学力調査の比較、認知的アプローチによるパフォーマンス評価の研究、英国ナショナル・カリキュラム美術科の到達目標のねらいなどを明らかにした。課題Ⅱについては平成 22 年に発表された国立教育政策研究所の「特定の課題に関する調査」を活用した解答類型を用いた学力調査や教員の評価力向上を図る研修の在り方について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research, we studied the evaluation method of the art education from two sides. First, we found the differences of the achievement test between the United States and Japan, the situated performance assessment in context by the cognitive approach, and the structure of the goals of the Art and Design of the British National curriculum. Second, by applying the achievement test of specific issues implemented by the National Institute for Educational Policy Research, we have confirmed availability of the test for training school teachers in primary and junior high schools.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育・評価・国際比較・図画工作・美術教育・学力

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習評価の現状から

平成 13 年文部科学省は平成 10 年の学習指導要領改訂にともなって指導要録の参考様式

を改め、それを受けて国立教育政策研究所は平成 14 年に「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料－評価規準、評価方法等の研究開発（報告）－」を作成した。小

中学校現場はこれらを参考に評価規準の作成や評価方法の開発などを行い一定の成果を出した。平成 21 年当時、中央教育審議会教育課程審議会は、平成 20 年の学習指導要領改訂を踏まえ、より一層簡素で効率的な学習評価が実施できる枠組みについて、専門的な観点から検討を行っていた。

(2) 本研究に関連する国内外の動向から

国内においては、小学校図画工作・中学校美術科は、「教師の主観で作品を評価している」「他教科と比べて評価規準を作成するのが難しい」などの課題を抱えていた。評価方法についての研究は少なく、わずかに京都市の美術教育研究会のテスト結果報告、山崎貞登（上越教育大学）らの技術科におけるルーブリックの研究があった。国外に関しては、本研究分担者の研究による全米学力調査の研究、認知的アプローチによるパフォーマンス評価の研究、英国のナショナル・カリキュラムの到達目標に関する報告などが報告されていた。

2. 研究の目的

本研究は美術教育に適した評価方法の開発を通して、美術教育における学力を的確に把握することを目的とする。そのために本研究は英米の美術教育における評価基準や評価方法を検討する。同時に平成23年度の新学習指導要領の完全実施を想定した評価方法の開発を行う。具体的には評価規準表や解答類型の作成、評価方法の提案などであり、これは教育現場が直面する課題の解決に結びつくとともに、分かりにくいとされる美術教育の学力を明確にすることにつながると考える。

3. 研究の方法

本研究では「課題Ⅰ」「課題Ⅱ」の二つの側面から課題の解決に取り組む。

(1) 課題Ⅰ：英米の評価基準や評価方法の検討

- ① イギリスのナショナル・カリキュラムにおける到達目標の分析。到達目標や評価基準表の翻訳、キーステージごとの事例の収集と分析を行う。
- ② 全米学力調査の実際および汎用性の検討。全米学力調査美術部門の翻訳及び評価の実際を報告するとともに、日本においての有効性を検討する。
- ③ ポートフォリオを用いた学習評価の事例研究。アメリカにおける先行研究である H・ガードナーを中心とする認知的アプローチによるポートフォリオを用いた学習

評価の支援システムの事例を検証する。

(2) 課題Ⅱ：評価規準表の作成と評価方法の開発

- ① 学習指導要領及び指導要録をもとにした特定課題の開発。平成20年告示の新学習指導要領及び平成21年度末までに公表される予定の指導要録の評価の観点をもとに、絵や工作などの特徴的な題材において評価を目的とした特定の課題を作成する。
- ② パフォーマンス評価の具体化。表現活動や鑑賞活動における児童・生徒のパフォーマンス評価の方法を検討する。特に制作過程等のプロセスを記録し相互行為分析することで評価の進め方を技術的に検証する。
- ③ 開発した評価方法の検証。開発した特定課題を評価規準表、解答類型、パフォーマンス評価等をもとに分析し、小学校や中学校における実地調査やアンケート調査等で検証し、汎用性を高めた上で広く公開する。

4. 研究成果

(1) 「課題Ⅰ：英米の評価基準や評価方法の検討」について

- ① 英国ナショナル・カリキュラム（イングランド）美術科における学習プログラムの変遷（1992年から2007年）を明らかにし、1999年版から2007年版への移行期における到達目標との関係とともに、研究資料として研究成果パンフレットやウェブ等に公開した。
<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~naoe>
- ② 日米の大規模な評価調査の比較研究を行った。日本では「特定の課題調査」の図工・美術に関する調査について、米国ではNAEPの視覚芸術(Visual Arts)の調査について分析・整理し、それらを比較対照した。統計的な処理を必要とする大規模な調査の利点（全国的な大きな傾向を把握できる）と限界（地域や学校の特徴を反映できない）を明らかにし、大規模評価調査の手法が個々の地域や学校の実践に応用できることと普段の授業評価の手法を大規模調査にも活用するための提言を行った。
- ③ 図画工作科・美術科におけるポートフォリオ評価とパフォーマンス評価については、調査を行う過程で特にプロジェクト・ゼロのMLV(Making Learning Visible)における「見えない学びや思考が見えるようにする」評価方法の提案

として、状況、場、文脈を考慮した可視化という観点より美術におけるパフォーマンスのコンテンツ分析・整理とともにルーブリックの設定方法の実践を目指した研究を所属機関の附属小学校、附属中学校との協力のもとで活用の実現性への提言を行った。

(2) 課題Ⅱ：評価規準表の作成と評価方法の開発

- ① 平成22年度に公表された指導要録の評価の観点と学習指導要領との関係を分析し、改善のポイントと学力の関係を分析した。これをもとに平成23年度に発表された国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）」を分析し、問題の作成や解答類型の設定方法について分析した。小学校では、小学校現場の教員が解答類型を用いて学力評価を行うことが可能であることが分かった。中学校美術科では、特定課題を用いて教員の評価力向上が図れることが明らかになった。一方で、特定課題や解答類型を用いた評価では、評価の実施者が“大人の思う『豊かな発想』を評価してしまう”“子どもの『発想』が問題の条件や解答類型によって左右される”などの感想を持つことが分かった。調査問題や方法の改善、解答類型の開発、海外との比較等を視野に入れた研究が必要であることが判明した。
- ② 小学校図画工作や美術科で、児童生徒が表現や鑑賞の活動を行う際に相互行為分析を行う視点を整理し、学会等で成果を発表した。特に、児童画の評価については、奥村高明『子どもの絵の見方 子どもの世界を鑑賞するまなざし』東洋館出版（2010）としてまとめ出版した。さらに相互行為分析を行う際の手がかりとして英国テート美術館が提案する「アートへの扉」の方法論を翻訳し、奥村高明・長田謙一監訳、「美術館活用術～鑑賞教育の手引き～」として出版した。
- ③ 平成24年度は特に課題Ⅰ及び課題Ⅱに関する調査と研究の成果をまとめ、A4カラー6pのパンフレット（2000部）として出版し、関連する学会や教育関係者に配布した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

- ① 奥村高明・村上尚徳・新野貴則、美術教

育に適した評価方法の開発を通じた学力に関する基礎的研究(1)～国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査 図画工作・美術」の検証～、日本美術教育研究論集、査読有、第46号、2013、pp. 83-90

- ② 奥村高明、テート美術館「アートへの扉」理論の検討(1)～西洋美術館におけるギャラリートークの相互行為分析を通して～、日本美術教育研究論集、査読有、第46号、2013、pp. 21-28
- ③ 奥村高明、協同と個を同時に成立させる学びのデザイン、教育研究、第67巻・第5号、2012、pp. 18-20
- ④ 池内慈朗、美術教育におけるパフォーマンス評価と学習の可視化－ハーバード・プロジェクト・ゼロの「文脈状況を考慮した評価論」からの示唆－、大学美術教育学会誌、査読有、第44号、2012、pp. 55-62
- ⑤ 直江俊雄、英国の中等学校における美術科ナショナル・カリキュラムへの対応 イングランド中西部における調査（1994年・2010年）から、芸術研究報、第32巻、2012、pp. 71-82
- ⑥ 村上尚徳「特定の課題に関する調査（中学校美術科）」のポイント」教育美術2011年12月号、No. 834、2011、pp. 42-47
- ⑦ 奥村高明、図画工作科におけるこれからの学習評価～「報告」と「参考資料・参考事例集」の活用～、教育美術2011年6月号、No. 828、2011、pp. 28-33
- ⑧ ふじえ みつる、美術教育における『感性』、『知性』と『知能』について、美育文化2011年5月号、第61巻5号、2011、pp. 13-17
- ⑨ ふじえ みつる、美術教育で培われる『能力』、慶應義塾大学出版会「教育と医学」、第699号、pp. 63-71、2011
- ⑩ 藤江充、美術鑑賞における「読解力」－「アートゲーム」と「美術批評」を通して、教育科学／国語教育、No. 720 第52巻(4)、2010、pp. 29-31
- ⑪ 奥村高明、図画工作科における指導要録改善のポイント、初等教育資料、通巻861号、2010、pp. 26-28

〔学会発表〕（計8件）

- ① 藤江充「美術教科のアセスメントから見えてくること 一日米の比較を通して」美術科教育学会、島根大学教育学部、2013年3月28日
- ② 奥村高明・村上尚徳・新野貴則「美術教育に適した評価方法の開発を通じた学力に関する基礎的研究(1)～国立教育政策

研究所「特定の課題に関する調査 図画
工作・美術」の検証～」第46回 日本美術
教育研究発表会2012、東京家政大学、2012
年10月14日

- ③ 奥村高明 (招待講演)『子どもの絵
の見方～相互行為分析のまなざし～』台湾
高雄市兒童藝術教育節教育論壇 基調講演、
国立中山大學國際會議場、2012年8月10日
- ④ 直江俊雄、英国中等学校における美
術カリキュラムの編成動向、美術科教育学会、
新潟大学、2012年3月28日
- ⑤ 奥村高明「造形活動における相互行
為分析の視座 (4) 分析単位としての姿勢の
変化と意味」第45回 日本美術教育研究発表
会 2011、東京家政大学、2011年10月16日
- ⑥ 池内慈朗 (シンポジウム招待パネリスト)
「創造性を育むMI (多重知能) 実践」、アメ
リカ教育学会 (第23回大会)、関西大学・
千里山キャンパス、2011年10月1日
- ⑦ 奥村高明「造形活動における相互行為分
析の視座 (3) 相互行為分析的な作品の見
方と指導の改善」第44回 日本美術教育研
究発表会 2010、東京家政大学、2010年10
月24日
- ⑧ 奥村高明「テート美術館の普及活動～日
本の鑑賞教育との比較～」第49回 大学
美術教育学会「東京大会」、武蔵野美術大
学、2010年9月19日

〔図書〕 (計7件)

- ① 奥村高明・池内慈朗・藤江充・直江俊雄・
村上尚徳・新野貴則、研究成果資料パン
フレット、図画工作科・美術科の学力と
評価～美術教育に適した評価方法の開
発を通して学力に関する基礎的研究～、
2013、8p
- ② 奥村高明・長田謙一監訳、ロンドン・テ
ートギャラリー編、美術出版社、美術館
活用術～鑑賞教育の手引き～、2012、
124p
- ③ 田中孝一・津田正之・岡田京子・奥村高
明、ぎょうせい、新評価規準を生かす授
業づくり 小学校編3 音楽科・図画工
作科、2011、195p
- ④ 藤江充・佐藤洋照 編著、日本文教出版、
図画工作科研究、2011、160p
- ⑤ ふじえみつる監訳、池内慈朗 (第2章担
当)、アーサー・エフランド著、日本文
教出版社、美術と知能と感性、2010、218p
- ⑥ 奥村高明、東洋館出版、子どもの絵の見
方～子どもの世界を鑑賞するまなざし
～、2010、104p
- ⑦ 池内慈朗、アメリカ教育学会編、東信堂、
現代アメリカ教育ハンドブック、2010、
p. 51

〔産業財産権〕
○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~naoe>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村高明 (OKUMURA TAKAAKI)
聖徳大学・児童学部・教授
研究者番号：80413904

(2) 研究分担者

藤江 充 (FUJIE MITURU)
愛知教育大学・教育学部・名誉教授
研究者番号：00106957
直江 俊雄 (NAOE TOSHIO)
筑波大学・芸術系・准教授
研究者番号：10272212
池内 慈朗 (IKEUTI ITSUROU)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：10324138
村上 尚徳 (MURAKAMI HISANORI)
環太平洋大学・教育学部・教授
研究者番号：10370082
新野 貴則 (NIINO TAKANORI)
山梨大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：60353380

(3) 連携研究者

萩原康仁 (HAGIWARA YASUHITO)
国立教育政策研究所・研究員
研究者番号：30373187